九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

近代日本における浄土教思想 : 清沢満之の「他力門哲学」を基軸として

脇, 崇晴

https://hdl.handle.net/2324/1654596

出版情報：九州大学, 2015, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

区分	甲

論文題目
近代日本における浄土教思想――清沢満之の「他力門哲学」を基軸として――

氏　名　　脇　崇晴

論　文　内　容　の　要　旨

近代日本における浄土教思想――清沢満之の「他力門哲学」を基軸として――

本論文の目的は、明治期に宗教哲学者、そして浄土真宗大谷派の僧侶として生きた清沢満之（一八六三～一九〇三）が、浄土真宗およびそれに繋がる浄土教の伝統をどのように受け止め、彼自身の思想を展開していったのかを明らかにすることである。従来の研究では、清沢晩年の思想的立場である「精神主義」（明治三十四～三十六年）に言及が集中している。しかし精神主義の思想では、浄土教に関わる概念（浄土教信仰の核心である「阿弥陀仏」、「浄土」、「念仏」をはじめとして）がほとんど語られていないため、彼において浄土教がどのように受け止められ、理解されたのかは必ずしも自明とはいえない。そこで、晩年の精神主義の思想だけでなく、それに先立って浄土教や浄土真宗の思想を考究した「他力門哲学」（明治二十八年）を基軸として、彼の浄土教思想を論じた

第一章としてまず浄土教信仰において最も根本的となる「阿弥陀仏」に対する清沢の理解を検討した。そこでは、清沢晩年の精神主義で語られる現世における阿弥陀仏の救済が、阿弥陀仏の能動性に由来する誓願の力を通じて現在のわれわれに浄土往生の真因である信心が与えられることで安心を得るというありようを意味するということが明らかとなった。

第二章では清沢における浄土観が主題として取り上げられた。彼において浄土とは、まずもって阿弥陀仏の清浄な心によって生じた仏国土であり、その心が「信」（他力の信心）として与えられることによってわれわれが現世ですでにそこにおいて安住を得る（現在の安住）ところのものである。ただし現世で浄土に入るといっても、それはあくまで「浄土に入らしむるが如し」なのであって、今生では決して完全に安楽な状態に入ることはない。心は浄土に住み遊びつつも、穢土にあるこの身は煩悩に深く囚われているといういわば二元的な緊張関係において浄土が捉えられるという思想は、親鸞の浄土観とも重なるものであった。同時に、阿弥陀仏の救済の現在性を重視する点に清沢独自の立場が見出された。

続く第三章において清沢の念仏思想が問題となっていた。彼において念仏とはやはり浄土往生の行としての「称名念仏」であり、しかも「自力」の修善の努力と不可分の緊張関

係において、「他力」の信心の深まりとともに阿弥陀仏への感謝として発せられる念仏（他力の称名念仏）であった。そこでは、たえず「自力無功」の反省（「懺悔」）とともに、それが同時に阿弥陀仏の救済に対する感謝へと転ずるという事態において念仏が他力の行として称えられるという、「自力の行」から「他力の行」への転換が見て取られた。

残る章では、、彼における浄土教思想と儒教との関係にも目を向けつつ、他力の信心が「至誠の心」として受け止められ、それに基づく最終的な「安心（あんじん）」（「現在の安住」）のありようが儒教における「天命」思想の大きな影響のもとに形成されたという点を論じる。

第四章では清沢の他力信仰のありようを「至誠の心」という観点から考察した。浄土真宗の宗祖・親鸞は、従来仏教で基本とされた「教、行、証」に加えて殊に「信」を重視したのであり、従って浄土真宗において信心の問題は看過されえない特別な問題である。彼の言う至誠の心は本来的には仏のものであり、しかも他力回向の心として浄土教の文脈において語られるものである。しかしまた、彼の他力信仰には自己省察を通じて道徳の実行に際して我執を離れられない自己を知るという契機が不可欠であり、その意味で両者は不可分の関係にあるといえる。そのとき至誠の心とは畢竟阿弥陀仏への絶対的な「信」のありようを意味し、それが彼の他力信仰の核心となっていることが示された。

第五章として最後に「現在の安住」と呼ばれる清沢晩年の安心（あんじん）のありようがどのように形成されたのかを、儒教的な「天命」の観点から考察した。彼は当時不治の病であった結核に冒され、迫り来る「死」に対する恐怖や不安といかに向き合うかという問題に直面した。この時期、彼はストアの哲人であるエピクテートスから、「如意（意のままになるもの）」と「不如意（意のままにならないもの）」との区別を知ることの重要性を学んだ。われわれにとって不如意である死や生を定める存在という点で「天命」と「如来」には共通の構造が見られるが、それに従うことによって死の恐怖や不安から免れることができるというのが彼の得た安心（あんじん）のありようであるということが明確に見てとられた。

清沢満之研究としての本稿の特徴は、大きく分けて次の三つの点に見出されるだろう。まずは、従来の研究において清沢の思想の最骨頂を言い表したとされる「精神主義」の諸文章からだけでは見えてこない「浄土教思想」を、しかもその根幹をなす「阿弥陀仏」、「浄土」、「念仏」といった思想を中心に包括的な形で、彼の思想の内に見出したということが挙げられる。次に、序章で確認したような、彼の思想を直ちに親鸞思想と同一視する見解からも、両者の異なる点のみを主張する立場からも距離を置いて、いわばその間を縫う形で可能な限り中立な観点から、親鸞と清沢との思想的な異同を慎重に見極めようと試みたことである。そして最後に、多くの先行研究が、少なくとも初期の「宗教哲学」と晩年の「精神主義」とに清沢の思想を分断して考えるのに対し、本研究では彼の思想を、「他力門哲学」を基軸とすることで、一貫したものとして捉えたという点が挙げられる。これらのことから、少なくとも彼の「他力門哲学」から晩年の「精神主義」の思想に至るまで、彼なりに受け止め、理解した「浄土教思想」に基づいて思索がなされたということが明らかである。以上は、先行研究に見られない本研究固有の成果であると私は信ずる。